

自己肯定感を高め価値開発力を育てる認知開発教育

公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

「経済・テクノロジー」専門委員会委員

榎田竜路

何故、生産性も学力も上がらないのか？

生産性 世界第 20 位（2018 OECD 加盟 36 カ国中 G7 中最下位）というデータが表している通り、日本の生産性の低さは大きな課題となっています。少子高齢化で生産人口が減少する中、生産性の低さを放置することは致命的なダメージをこの国に与えるでしょう。生産性の低さの原因についていろいろ取りざたされていますが面白いデータがあります。

機敏性 63 ヶ国中第 57 位（IMD World Talent Ranking 2017）

「機敏性」とは新しい技術や考え方を取り入れる能力のことを指しますが、日本はそれが異常に低い。特許数は世界一を誇り、World Economic Forum の調査によると労働人材評価は世界第 4 位というのに、その力を社会や組織に生かすことが出来ていない実態がこのデータからも明らかになっています。

一方、教育現場では学力向上を目指し、様々な試みがなされていますが、これも上手くいっていない。補習や機械学習といった新しい要素を取り入れても学力の上がない子供たちが少なからず存在する。私はその原因を日本の子供たちの自己肯定感の低さにあると考えます。

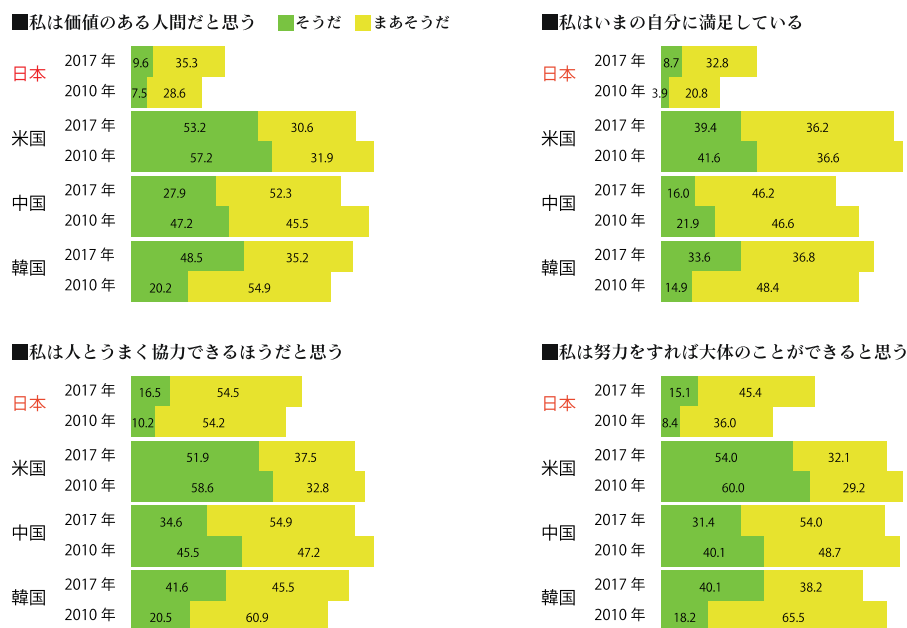
異常に低い日本人の自己肯定感：

自己肯定感の低い人間が、浚刺とした気概を持って自己の向上に努めようとするのでしょうか？ 積極的に自らの価値観を生かして、新しい価値を生み出そうとするのでしょうか？ 新しい考え方に積極的に反応し、それを自らのものにするための学習を、困難に立ち向かいながら続けることができるのでしょうか？

以下のデータをご覧ください。これは国立青少年教育振興機構が2018年3月に発表した『高校生の心と体の健康に関する意識調査報告書〔概要〕 ー日本・米国・中国・韓国の比較ー』から抜粋し作成したものです。

自己肯定感

日本の高校生は「私は価値のある人間だと思う」「私はいまの自分に満足している」などの自己肯定的な項目に対し、「そうだ」「まあそうだ」と回答した割合は、いずれも7年前よりも高くなっている。

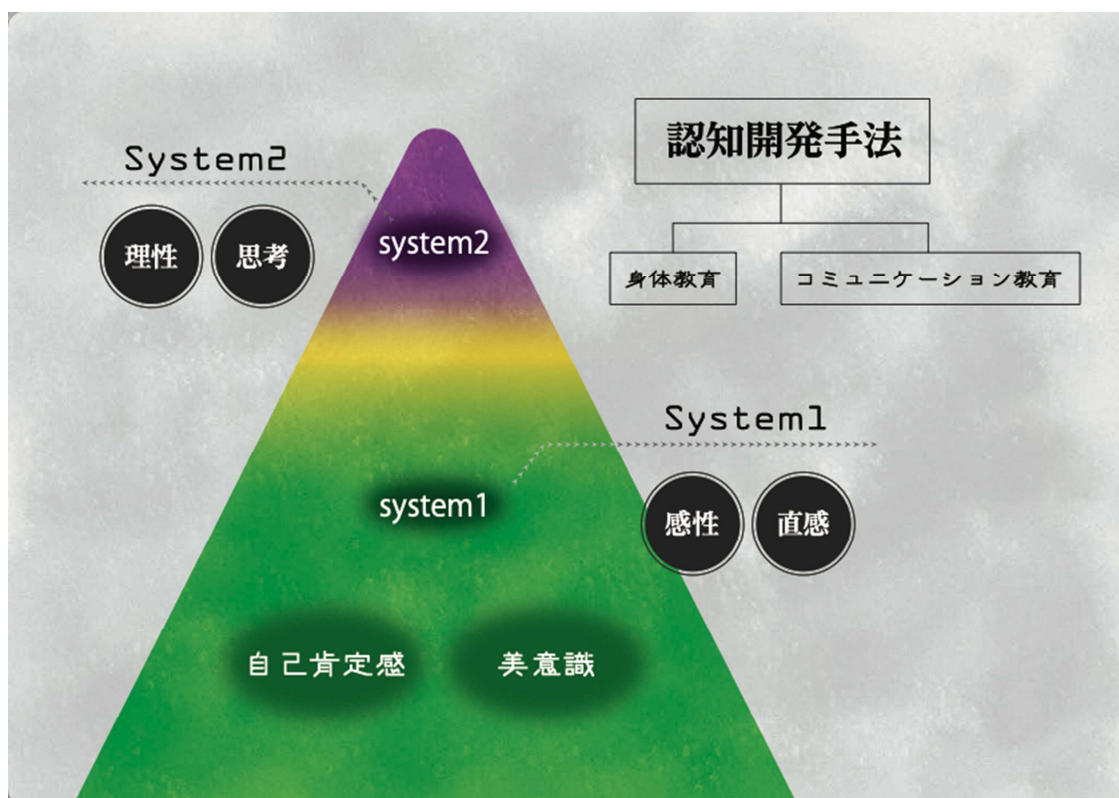


何故、System 1 教育で自己肯定感が高まるのか：

心理学の用語で『二重システム理論』といわれる概念があります。もともとスタノビッチとウェストという心理学者が提唱したものです。簡単にいうと脳の情報処理には「感じるシステム」である System 1 と「考えるシステム」である System 2 があるという考え方です。（この二重システム理論を発展させて「行動経済学」を打ち立てたダニエル・カーネマンは、2002年にノーベル経済学賞を受賞）

System 1 は無意識的に「なんとなく」働き、System 2 は意識的に根拠を元に働きます。したがって「なんとなく自分には価値がある」と感じる自己肯定感 System 1 の働きといえます。

System 1 を育てる方法として、よく知られているのは「褒める」ということですが、これだけでは System 1 を十全に育てることはできません。それは褒めるという行為自体が「言語」を使って行われるので、頭が柔らかい幼児には通用しても、疑い深い大人の System 1 に浸透させることは難しいからです。



System 1 を育て System 2 を連動させる認知開発教育：

上のイメージ図で示しましたが、自己肯定感と価値を生む源泉である美意識は共に System 1 の働きです。人間の発生過程を考えた時に System 1 が最初に生まれ、直立二足歩行の獲得を契機に、System 2 が形成されてきたと考えられます。

System 1 の教育手法として開発されたのが認知開発手法です。

『物事の中に新しい関係性を見出し、価値化したものを普及・展開させていく力』である認知開発力を向上させる認知開発手法は「身体教育」と「コミュニケーション教育」という二つのアプローチから成り立っています。

① 身体教育について：

人間以外の動物は体構造に沿った動きしかしません。しかし人間は直立二足歩行に移行して以来、体構造から解放された動きを行う事ができるようになりました。このこと自体、System 2 の発生と進化に寄与することになりましたが、「運動」ということでは他の動物より劣勢に立たされることになりました。動物は自然状態でその身体を合理的に使って全力発揮することが出来ます。逃げるにしても戦うにしても持って生まれた身体を十全に発揮することで生き延びる確率を上げることが出来るのです。ところが人間は、直立二足歩行を行う体構造を得たせいで、自然状態では自らの「身体を一つにまとめて使う」ことが出来ません。つまり我々の身体は、全力発揮することが困難な身体なのです。

これが我々の持つ根源的な不安の要因です。

自分の身体を一つにまとめて使うことは、自己肯定感の基本要素となります。直立二足歩行を遂げて以来、人類は「身体を一つにまとめて使う」ための方法を編み出してきました。

その方法は、世界の諸文化に合わせてそれぞれ独自に存在しますが、日本においては、「行儀」という言葉で表されます。「行儀が悪い」とは身体を一つにまとめて使っていない時、何かに寄りかかって所作を行なっている時に使われる叱責の言葉です。直立二足歩行というバランスの悪い身体を使い、全力発揮するためには、何かに寄りかかる状態は緊急事態に対処できない（身体を一つにまとめて動けない）危険な姿勢です。なので、肘をついて食事をすると「行儀が悪い」と言われることになります。どんな時でも何ものにも寄りかからない姿勢をとることが、行儀の文化として伝承されてきました。

行儀は暗黙知、つまり System 1 に形成される学習の結果なので、その伝承は見よう見まねで行なわれ、叱られながら身体に刷り込むものでした。ところが敗戦後、日本の生活様式が畳の生活から机と椅子の生活に変化しました。生活様式の変化に合わせて行儀の文化も変容させるべきだったのに暗黙知ゆえに誰もがそのことに気づかぬまま日本の行儀の文化は消滅しかけています。

姿勢の悪い生徒は学力も低いという感覚は教育関係者なら誰でも持っている実感でしょう。また青少年犯罪を担当する警察関係者からも非行を繰り返す子供は姿勢が悪いという報告も受けています。

日本の文化は、いわば行儀の文化です。日本の伝統的な身体運用の文化を見直し、それを子供たちに指導することは自己肯定感を高め美意識を育むために絶対に必要なことだと私は考え、カリキュラムを作り、各地で実践しています。

① コミュニケーション教育について：

ここでいうコミュニケーションとは「読解力」と「表現力」のことを指します。文章や会話等の様々な情報を読み解く力とそれを編集し表現する力はコミュニケーションの基本となるものです。しかし通常の国語教育は言語コミュニケーションの領域でしか行われません。

非言語コミュニケーションの領域である System 1 と言語コミュニケーション領域である System 2 を連携・連動させる教育を行うために私は「映像言語」を用いた教育手法を作りました。

人類の言語は「画像言語」「音声言語」「文字言語」と発展してきました。現在、我々の思考は System 2 の領域である文字言語中心に行われています。

私は、映画の研究を進める過程で、これら三つの言語を同時に連動させながら使うことで脳が活性化してくる事実を発見しました。通常映画は「画像言語」「音声言語」の二つを連動させて製作されますが、これに「文字言語」を重要な要素として加えることで新しい情報の形が生まれてきました。

私は三つの言語を連動させたものを「映像言語」と呼んでいます。

System 1 と System 2 の言語を連動させることで今までとは違った脳の使い方を体験することになります。

情動行動を司る脳（System 1）は、主語と時間が理解できません。それは脳科学の分野ではよく知られている事実です。理性の脳である System 2 は主語も時間も認識できるけれど、System 1 はできない。だから感情的に誰かに向かって「馬鹿野郎！」と叫んだとしたら System 1 の方は自分が馬鹿野郎と言われたのと同じ状態になります。「人を呪わば穴二つ」という諺がありますが、真を穿った言葉としか言いようがありません。

感情的に人の悪口を言えば自分を傷つけることにはなりますが、反対に感動したり、素晴らしいと感じたりする場面を増やすと、その感情はそのまま自分に向けられることになるのです。

認知開発手法の柱は美意識を働かせた映像言語の製作となっています。

自らの美意識（真善美の感覚）が反応するものを「取材・整理」「編集」「伝達」という三つの段階を通じて映像言語化していく過程で自己肯定感と美意識が高まっていきます。

まとめ：

ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士が、その知性の育みかたについて質問を受けた時に「素読」と答えたそうです。素読とは正座し姿勢を整え論語の本を手で持ち、「子曰く」と大きな声で音読していく稽古法のことですが、正に身体感覚＝System 1 と理性＝System 2 を連動させるものだと思います。

もし学力を上げたければ System 1 と System 2 を連動させなければなりません。新しい価値を生む力を育むのも同じです。機敏性も正に身体感覚の問題であるということを理解すべきでしょう。

理解するためにも理解したものを実行するためにも System 1 教育である認知開発教育を実践していくことは重要です。

日本の潜在力を生かすための認知開発教育を機敏性高く子供から大人まで実践することを強く推奨します。